

ヒトパピローマウイルス（HPV）感染症説明書

（１）病気の説明

ヒトパピローマウイルス（HPV）は、ヒトによって特殊なウイルスではなく、多くのヒトが感染し、そしてその一部が子宮頸がん等を発症します。100種類以上の型がある HPV の中で、子宮頸がんの約 50～70%は、HPV16、18 型感染が原因とされています。HPV に感染しても、多くの場合ウイルスは自然に検出されなくなりますが、一部が数年～十数年間かけて前がん病変の状態を経て子宮頸がんを発症します。（国立がん研究センター：子宮頸がんは国内では年間約 10,000 人が発症し、年間約 2,900 人が死亡すると推定。）

ワクチンで HPV 感染を防ぐとともに、子宮頸がん検診でがんを早期発見し、早期に治療することで子宮頸がんの発症や死亡の減少が期待できます。

（２）HPV ワクチン（サーバリックス®、ガーダシル®、シルガード®9）の効果について

現在、定期接種として接種できるワクチンは、国内外で子宮頸がん患者から最も多く検出される HPV16 型及び 18 型に対する抗原を含んでいる 2 価ワクチン（サーバリックス®）と 6 型、11 型も加えられた 4 価ワクチン（ガーダシル®）に加え 9 価ワクチン（シルガード®9）も承認され、令和 5 年 4 月から定期接種化されました。海外の報告では、感染及び前がん病変の予防効果に関して、各ワクチンとも高い有効性が示されており、初回性交渉前の年齢層に接種することが各国において推奨されています。

HPV ワクチンの安全性や有効性についての詳しい情報については、厚生労働省のホームページに、HPV ワクチンに関するリーフレットが掲載されていますので、こちらをご覧ください。

◆厚生労働省ホームページ◆

「ヒトパピローマウイルス感染症 ～子宮頸がん と HPV ワクチン～」



（３）HPV ワクチンの主な副反応

注射部位の疼痛（83～99%）、発赤（30～88%）及び腫脹（25～79%）などの局所反応と、軽度の発熱（5～6%）、倦怠感などの全身反応がありますが、その多くは一過性で回復をしています。まれに重い症状（重いアレルギー症状、神経系の症状）が起こることがあります。

医療機関から副反応の疑い例として報告されたうちの重篤症例（報告者が重篤として判断するもの）の発生頻度は、サーバリックス®およびガーダシル®で 1 万人あたり約 5 人、シルガード®9 で 1 万人あたり約 7 人です。（発売開始から令和 4 年 9 月 30 日までの数値）

（４）接種に当たっての注意事項

予防接種の実施においては、体調の良い日に行うことが原則です。お子様の健康状態が良好でない場合には、かかりつけ医等に相談の上、接種するか否かを決めてください。

また、お子様が次の状態の場合には予防接種を受けることができません。

- ① 明らかに発熱（通常 37.5℃以上をいいます）がある場合
- ② 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
- ③ 受けるべき予防接種の接種液の成分によってアナフィラキシーを起こしたことがある場合
- ④ その他、医師が不適当な状態と判断した場合
- ⑤ 妊娠中もしくは妊娠の可能性がある場合（※13歳以上の女子）

（５）予防接種による健康被害救済制度について

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく給付を受けることができます。

ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因（予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等）によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて、審議し、予防接種によるものと認定された場合に給付を受けることができます。

※給付申請の必要が生じた場合には、診察した医師、上天草市健康づくり推進課へ御相談ください。

予防接種と子どもの健康 参照

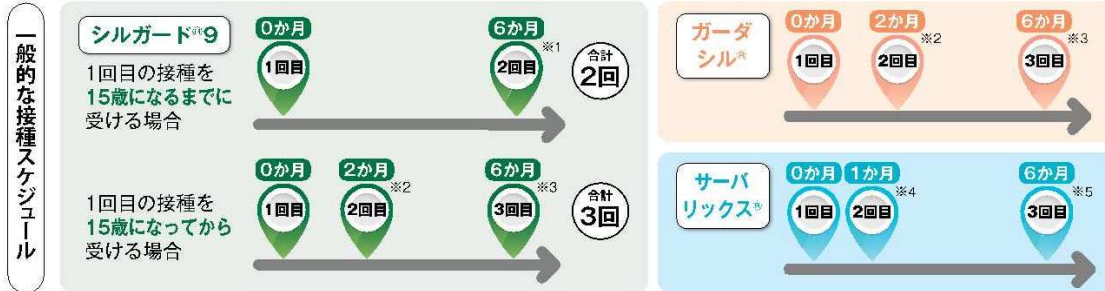


HPVワクチンの接種について

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、子宮頸がんの原因となるHPVの感染を防ぐワクチン(HPVワクチン)の接種を提供しています。対象者は公費により接種を受けることができます。

現在日本において公費で受けられるHPVワクチンは、防ぐことができるHPVの種類(型)によって、2価ワクチン(サーバリックス[®])、4価ワクチン(ガーダシル[®])、9価ワクチン(シルガード[®]9)*の3種類あります。一定の間隔をあけて、同じワクチンを合計2回または3回接種します。接種するワクチンや年齢によって、接種のタイミングや回数異なります。どのワクチンを接種するかは、接種する医療機関に相談してください。

*2023年4月から、シルガード[®]9も公費で受けられるようになりました。



HPVワクチンのリスク

HPVワクチン接種後には、接種部位の痛みや腫れ、赤みなどが起こることがあります。まれですが、重い症状(重いアレルギー症状、神経系の症状)^{※1}が起こることがあります。

発生頻度	2価ワクチン(サーバリックス [®])	4価ワクチン(ガーダシル [®])	9価ワクチン(シルガード [®] 9)
50%以上	疼痛 [*] 、発赤 [*] 、腫脹 [*] 、疲労	疼痛 [*]	疼痛 [*]
10～50%未満	掻痒(かゆみ)、腰痛、筋痛、関節痛、頭痛など	紅斑 [*] 、腫脹 [*]	腫脹 [*] 、紅斑 [*] 、頭痛
1～10%未満	じんましん、めまい、発熱など	頭痛、そう痒感 [*] 、発熱	浮動性めまい、悪心、下痢、そう痒感 [*] 、発熱、疲労、内出血 [*] など
1%未満	知覚異常 [*] 、感覚鈍麻 [*] 、全身の脱力	下痢、腹痛、四肢痛、筋骨格硬直、硬結 [*] 、出血 [*] 、不快感 [*] 、倦怠感 [*] など	嘔吐、腰痛、筋肉痛、関節痛、出血 [*] 、血腫 [*] 、倦怠感、硬結 [*] など
頻度不明	四肢痛、失神、リンパ節症 [*] など	失神、嘔吐、関節痛、筋肉痛、疲労 [*] など	感覚鈍麻、失神、四肢痛 [*] など

サーバリックス[®]添付文書(第14版)、ガーダシル[®]添付文書(第2版)、シルガード[®]9添付文書(第1版)より改題

*接種した部位の症状

因果関係があるかどうかわからないものや、接種後短期間で回復した症状をふくめて、HPVワクチン接種後に生じた症状として報告があったのは、接種1万人あたり、サーバリックス[®]またはガーダシル[®]では約9人、シルガード[®]9では約8人です^{※2}。このうち、報告した医師や企業が重篤^{※3}と判断した人は、接種1万人あたり、サーバリックス[®]またはガーダシル[®]では約5人、シルガード[®]9では約7人です^{※2}。

※1 重いアレルギー症状:呼吸困難やじんましん等(アナフィラキシー)、神経系の症状:手足の力が入りにくい(ギラン・バレー症候群)、頭痛、嘔吐・意識低下(急性散在性脳脊髄炎(ADFM))等
 ※2 HPVワクチン接種後に生じた症状として報告があった数(高反応疑い報告制度における報告数)は、企業からの報告では販売開始から、医療機関からの報告では平成22(2010)年11月26日から、令和4(2022)年9月末時点までの報告の合計。

出荷数量より推計した接種者数(サーバリックス[®]およびガーダシル[®]は384万人、シルガード[®]9は5.2万人)を分母として1万人あたりの頻度を算出。

※3 重篤な症状には、入院相当以上の症状などがふくまれていますが、報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。

〈 HPVワクチン接種後に生じた症状の報告頻度 〉

1万人あたり約8～9人^{※2}



〈 HPVワクチン接種後に生じた症状(重篤)の報告頻度 〉

1万人あたり約5～7人^{※2}